

---

# Genuin

麻友里

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

G e n u i n

### 【コード】

N 6 8 8 0 N

### 【作者名】

麻友里

### 【あらすじ】

ひよんなきっかけで出会った二人。

樹里と彼は互いに惹かれあっていく。

そして互いを認め合った平和なある日、二人に試練が待ち受ける。文化も価値観も違う国際恋愛、二人はどう乗り越えていくのか。未来へと進行していく二人の距離はどこまで続いていくだろうか。



## a o p p o r t u n i t y

「樹里さん、はじめまして」

私の目の前にいる一人の外国人が片言の日本語で手を合わせながら近寄ってきた。

お互い初めて会った。

「アツサルームアライクム」彼の国の言葉で私も微笑む。

私はずっと彼を待っていた。

.....

「だったらさあ、樹里ちゃん会いに行つてあげてよ。きつとき、初めての日本でさみしいかもしれないし、現地語で仲良くなってあげてよ」

「わかったよ、じゃ、今度の土曜に熊本城に行つたらその人がいるんだね」

電話を切った後、哲也の友達に熊本まで会いに行く約束をしてしまっていた。

何年ぶりだろう、あの国の人に会うのは。

2006年、私はインド洋に浮かぶ小さな島国にいた。

そこで、ボランティア活動をしていた。

英語が得意じゃなかった私は現地の言葉をわりとすぐ覚えた。

現地人と同じ生活レベルでその国の文化を覚えた。

現地の言葉が上達すると、たくさんの友達、知人ができた。

自分と同年代の女の子の職業訓練をしていた私は、彼女たちとプラ

イベントでも親しくなり、  
生活や文化の違いを超えた友情を育んだ。  
任期が終わって帰国する時には、自分がなぜこの国に生まれなかつたのか・・・  
そう思うほどあの国に染まっていた。

あれから何年だろう・・・あの頃、自分自身が毎日喜怒哀楽をしなから、  
しっかり輝いている自信があった。

正直、あのままずっとあそこで一生暮らしたかった。  
帰国後、私は毎日実家において、父の仕事を手伝って、本業の美容師から遠ざかっていた。

自分がやりたいと思うことが様々な事情で実行できず、毎日悶々とし、過去にしがみついていた。

そんな時、タイでカメラマンをしている友人の哲也が再び私にあの国とのつながりを作ってくれたのだ。

「私、今度の土曜日、熊本に行くつもりだけど、仕事休んでも平気？」

作業場で機械の点検をしていた父と母に尋ねると

「あらそう、土曜日はどうせ大型注文ないし、いいよ、気をつけて行っておいで」

と二つ返事が返ってきた。

.....

前日の夜、久々に、鏡を見つめた。

いつも実家と作業場での生活で、鏡をまともに見ていなかった。

昔のように外に出ることもなくなっていて、10Kgも太っていた。

明らかに手入れをしていなかった肌を見つめて落ち込んだ。  
こんなにも外見を気にしなくなっていたのかと情けなくなり、またいつものように憂鬱なため息を吐く。

帰国してずっと、この鬱蒼とした気分がとれない。

でも、なぜだろう、明日の事を考えると、心の一番底の部分が大きく波を打ち、妙に気分がいい。鏡の中の私の口角が少し上がった。

「よし・・・やるか・・・」伸びて原型に戻った眉毛を抜き、キレイに整える。

クレンジングとクリームで念入りにマッサージをし、顔を洗った後、しっかりと化粧水と、パックで保湿をする。

風邪をひいて、鼻水をとりすぎたせいか、鼻の下が赤く、かさかさになっていた。

保湿クリームをさらに重ねて塗った。

最後に伸びきった髪を切った。

腰まであった髪を肩でまっすぐにそろえると、気分がとても軽くなった。

翌朝、念入りに化粧をし、短くなった髪をアイロンでカールする。

「よし。決まった。さて・・・行くか・・・」

「行ってきまーす」玄関から家の中に叫びながら熊本に向かった。

待ち合わせの時間より随分早く到着してしまった。

このまま凍えてしまうかと思うほど冷え込んでいた。

息を吐いて手を温める。指がかじかんで足踏みをした。

数十分後、年配の人を乗せた大きなバスが駐車場にはいつてきた。

それを機に、いろんな大型バスが到着し、

バスガイドが様々な団体客を従えてぞろぞろと正面入り口に集まりだした。

私は隅のほうで、ぽつんと外国人の一団をまっていた。

その中に哲也の友達がいるらしいのだ。

「どうやって見つけたらいいのだろう・・・」

私の記憶にあるあの国の人たちは、茶色い肌、小柄で華奢な体格、短く整えた髪。

よく言えば・・・ユーモアがあって、ジョークが好きで、常に笑っている。

悪く言えば、真剣さに欠ける、事なかれ主義。

思い出しながらまた口角がきゅっとあがっていく。

あの国のその良さがわかるまで、何度泣かされたっけ・・・

そうそう・・・公の場所ではシャツを好んで、キレイな身なりをしているはず。

意外と見栄っ張りなんだよなあ・・・Tシャツにまでアイロンかけたりするし。

目の前に外国人の集団が流れてきた。  
私は目をこらして、茶色い肌の小柄できれいな身なりの人物を探した。

数名該当者を見つけ、話しかけるタイミングを待っていた。  
その時、別の方向から彼が人並みを掻き分け私の名を呼んだ。

彼は私の想像から離れた人物で、濃紺のフリースに破れたジーンズとスニーカー、  
アフロのような小さな天然カールした髪の毛、丸い目、丸い鼻、丸い顔。

どれも私の予想から外れていたが、一目で親近感の湧く人物だった。  
片言で挨拶をされ、私も早速彼の母国語で挨拶をすると、  
「ワーアライクムサラーム」と嬉しそうに驚いた顔で返事をしてくれた。

それが私たちのファーストコンタクトだった。

今思っても不思議な出会いだった。  
2年もあの国に住んでいて、一度も、あの国の男性を好きになった事はなかった。  
恋愛対象外というか、それ以前の問題だった。

でも、私は彼と言葉を交わした瞬間から、何か不思議なものが生まれたのを感じた。

懐かしいとか、親しみやすいとか、その部類だと思った。

私たちは一緒に熊本城を見学して回った。

自己紹介や、彼の国での思い出話、熊本城の説明、そんな他愛もない事を

彼と同じ言葉で話巢私に彼は何度も「すごい！」と嬉しそうに褒めた。

あっという間の時間だった。

明日には彼は九州から広島、東京、そして帰国する予定だった。

私は久しぶりに、あの国の人に会って、会話できたことを純粋に楽しかった。

帰り際、彼と握手をした。

私が初めて彼に触れた日だった。

## begin

握手・・・？

家に着くまでに、その事がなぜか気になっていた。

・・・なぜ、ハグをしなかったのか・・・？

なぜか、ためらったような気がする。

その夜、彼からメールが届いた。

いい時間をすごした事へのお礼と、これからも仲良くね。という内容。

なんとなく、気分がいい。

夕飯のとき、「今日、どうだった？」とたずねる父と母に、いかに楽しかったかを話した。

いつも、あまり話さない私が止まらない勢いで話す姿を笑いながら冷やかした。

「お前の話は全部、そいつの事じゃないか」

「あはは・・・そうだね。私、彼とだったら結婚してもいいな・・・」

言った後、自分でも驚いた。

でも、なぜか、そうなるような気がしていた。

帰国してからも彼は毎日連絡してくれた。

友達や家族をとっても大切にする人たちだから、私のことも、新しい

友達として

気にかけてくれているのだとわかっていた。

少しづつ、私たちのバランスが微妙に揺れ始めていた。

.....

数ヶ月後、いつものように私たちはパソコンと受話器越しでデートを重ねていた。

毎日の彼からの電話も、きり際が難しくなっていた。

「自分でもおかしいんだけど、樹里のことばかり考えてるよ」

私たちはいつの間にか、そうなっていた。

私たちはお互いの将来の夢を語り合い、

「未来がいかに明るく、嬉しいもので、

そこにはずっとお互いが存在していて、こんなに幸せなことってないよね。」

そんな普通に恋人たちが繰り広げる甘く、爽やかな時間を私たちも共有し始めていた。

離れている分、思いも急速に大きくなった。

彼は、まったく不思議な人だった。  
あの国の人とま全く違う感覚をもっていた。

もともと、日本人や他の外国人の友人が多い彼は、固定観念がなく、新しいものを受け入れる柔軟さがあった。

それから、彼にはかわいい癖があった。よくいろんな言い間違いをした。

私の名前も呼び間違えた。

「じゅんこじゃないよ、じゅりだって。一体誰とまちがってるんだか」

「あはは、ごめん、日本人の名前はどれも似ているんだもの」

いつも私はそれを冷やかに、笑いの耐えない楽しい幸せな時間だった。

お互いが10代の頃に戻ったかのような錯覚を感じていた。

それは私にとって、限りなくピュアで、健全な恋愛だった。

一つだけ除けば・・・。

.....

彼には妻と息子がいた。

私はそれを知った上で、彼との距離を縮めた。

彼の国は、法的に一夫多妻が認められている国。  
男性は4人まで妻を設ける事ができる。

彼の考え方は違っていた。

彼は、第2夫人はもうけず、離婚し、私との生活を始めたということ。

彼は10年以上、妻と息子と別居していた。

「これが僕の進むべき道なんだと思うし、ずっとそうするべきだったんだ」

彼の妻と息子はオーストラリアにいた。

「何度も妻と離婚の話をしてきた。でも結局息子が大きくなるまでは・・そういつて、お互い、はつきり話し合っていなかった」

あの国に住んでいた私は、十分、その考え方が理解ができた。

だから何度も、彼と、その事を話した。私の不安をぶつけるたびに、彼は時間をかけてゆっくりと説明し、希望を持つとうとした。

私は、彼の計画を受け入れ、二人の将来が寄り添えるように願った。

そしてある日、私たちは密かに結婚を誓い合った。

それはやはり、とても穏やかな時間で、二人のもっともピュアな時間だった。



d o u b t

「樹里さんですか？直接お話ししたいことがあります・・・」

突然、ある女性からメールが届いた。

その人は知人の知人で現在、彼の国にいる日本人女性だった。

私はもともと、勘が鋭いほうで、なぜだか、急に、彼の事だと悟った。

何故か・・・

彼はよく私の名前を呼び間違えた。

その女性は順子さんだと名乗った。

彼女が言うに、彼とは約1年くらい、恋人関係にあると言う。

そして、私と彼が出会ったのを機に捨てられた。

だから彼はそんなひどい男だから、気をつけてくださいということだった。

メールを読みながら全身が強ばる。

頭の前からつま先まで、冷たくなっていく。

それはまだ、ほんの始まりだった。

メールに記載されていた番号に電話をしてみると、いぶかしげな返事があった。

「はじめまして・・・メールみました。・・・あの、樹里です・・・」  
「・・・あ・・・突然すみません・・・でも、どうしてもお話したくて」

彼女はしつかりした口調で、彼とのいきさつを2時間以上にわたって話した。

彼女と彼は1年前から知り合い、半年前くらいから数回、肉体関係を持っていたという。

彼が日本から帰った後から態度がおかしく、電話も無視されるようになった。

聞いただすともう終わりにしたいと一方的にいわれた。

そしてその時に、私の存在を知ったのだと。

「・・・だから、樹里さんも気をつけたほうがいいよ。あいつはすごい最低な男だよ。」

自分がいかに傷つき、彼がいかにひどい男かと何度も何度も早口でまくし立てた。

両手が震えて受話器を持つ手がしびれた。

何も考えられなかった。ぼーっと今までの事を思い出していた。

初めて握手した日・・・

すでにあの人を特別に感じていた・・・

聞きたくない・・・聞きたくない・・・

もう止めて・・・

違う・・・彼はそんな人じゃない・・・

でも彼には妻と息子がいる・・・

やっぱり・・・私も？・・・

「・・・妻子あるくせに私に手をだして、また樹里さんにも手をだした。私はいつにもてあそばれた。だから樹里さんもそうならないように・・・別れたほうが」

「・・・めて・・・。」

「え？・・・だからね、あいつは、日本人の女をバカにしてるんだよ。すっごく最低で無能な男って気づいてませんか？ 樹里さんもきくと遊ばれてる・・・」

「・・・止めてください・・・。もうこれ以上聞きたくないです・・・」

「聞きたくないって・・・でもあなたのためを思うから、全部私の恥をおしんで・・・」

「止めてください！！！！これ以上、あの人を悪く言わないでください」

「・・・」

「あなたと私と一緒にしないで！」

そのあと沈黙が続いた。

彼女の話は事実だろう。

本当に、私以外の人と、関係を持っていたのだろう。

妻子があつて、彼女とも関係があつた。

そして、あの方は彼女を傷つけた。

彼女はあの人を愛していた。

あの人は・・・？

「最低・・・」

彼女は何度、彼に触れたのだろう。

彼女に彼は何度、優しく笑いかけたのだろう

彼はどんな風に彼女に触れたのだろう。

「最低・・・」

私は？

たった一度、触れただけ。

あの人のキスすら知らない。

私は？

たった一つの約束をした。

遠い将来にあるはずの未来を約束した。

彼から愛をもらった。

彼に愛をあげた。

それは私と彼の間には本当に存在しているものだと感じる。

私と、彼との間には、間違いなく、存在していて、暖かい何か私

たちを繋げている。  
他の誰かはそれを感じる事はできない。

私と彼だけのもの。。。

「もしもし。。。すみませんでした。。。」

「。。。いえ。。。」

彼女の声は、苛立っているように感じた。  
私は深呼吸をした。

「。。。お話してくださってありがとうございました。。でもあなたは、彼に奥さんがいる事を知った上で関係をもったんですよね？」

「だったら何？」

「いえ。。。お互いが大人である以上、同意の上、関係をもたれたのですよね。」

「。。。だけど、結局私はすごく傷ついたので、あいつに捨てられてすごく。。。」

「。。。あの。。。あなたのお話で私もショックです。悲しいです。正

真、怒りとか、なんだか、よくわからないくらい、心が痛いです・  
」

「・・・だったら、早く別れなさいよ。あなたも遊ばれてるだけだから」

「・・・いえ・・・違うんです・・・。違つとおもいます・・・あなたと私は違います。

これを機に私はあの人から去るだけです。あの人をすぐには嫌いになれません。

だからあの人を批判することもしません・・・私は、彼から幸せな気持ちしか貰つてないから・・・」

「・・・あんた相当なバカ？」

「・・・はい・・・バカかもしれない。あの、最後に一つ聞いてもいいですか？

彼はあなたに、愛していると言つた事ありますか？」

「・・・」

その問いに、彼女は答えなかった。

そしてそれ以来、彼女からの連絡も無くなつた。

なんとなく、彼は彼女に愛は無かつたはずだと感じていた。

本当に、遊びだったんだろうな・・・とチクチクする心そのまま感じていた。

私が盲目になっていたからではない。

むしろ、いつも、怯えていた。

こんなに幸せな事であるはずがないと、常に怯えていた。

だから、彼女の話聞いていて、悲しみに沈みながら、どこか、やっぱりね・・・

そう、落ち着いていられた。

彼女との会話の後、彼に対して私はすぐに別れの連絡をした。

「あなたとお付き合いをしていた人が、悲しんでいるの・・・。私もとても悲しくて、つらいよ。だから・・・さようなら」

それだけを言って、電話を切った。

s e c o n d c o n t a c t

数週間、私は死人のようになっていた。

電話を貰った時、あんなに毅然としていられたのに、後からどんどん、悲しみに沈んで行った。

仕事をしていても突然涙があふれてくる。

突然、機関銃のように喋りだして、笑いが止まらなくなる。

毎日私をみている両親は不安で仕方がなさそうだった。

家の仕事と、自分の部屋でしか生きていなかった。

外に出るのは億劫で、何もしたくないと思った。

このまま消えてしまいたいと思った。

あれ以来、いつものように毎日彼は電話をかけてくる。

一度もでなかった。

彼が私を呼んでいる携帯を握り締めて何度も何度も泣いた。

メールを開くと、彼からのメールが何件も送られている。

スクリーンが真っ黒に見えるほどの長い文で、例の話とそのいきさつ、私に対する思い、

すべてが書かれていた。

何度も何度も同じことを彼は諦めず書いた。

新しく彼が感じている気持ちもかいた。

それを読んでまた泣き崩れた。

信じたいもの。信じられないもの。

見つからない答えを探そうともがいていた。

しばらくそんな状態が続いたある日、哲也が連絡をくれた。

「気分転換にタイにおいでよ。ぱっつとしようよ。いつでも待ってるからさ」

彼の優しさにまた泣いた。

どれだけ泣いたのだろう、少しずつ、消化し始めた私は遂にタイに出かけた。

傷心旅行・・・かつこわるい響きに苦笑いしながらも、久しぶりに長旅をすることに嬉しさもこみ上げてくる。

何をする予定もなくチケットを買った。

バンコクでうるうるして、すべてを忘れてしまおうと思った。

悲しみとか、苦しみとか、迷いとか、すべてをバンコクの街に捨ててこようと思った。

バンコクに着くと空港に哲也が迎えに来てくれた。

数年ぶりに会う彼は元気そうで、相変わらず、私たちは兄と妹のように安心した気持ちで居られた。

その日、哲也のうちの泊めてもらい、夜に色んな話をした。でも結局最後は私と彼の話。そればかりだった。

酔った勢いで、私が彼を今でも愛している事、彼も愛しているだろうと言っ事、

そして、根拠は無いけど、一生、私たちはお互いを求めていくような気がする・・・

と言っところまで暴露して眠った。

.....

翌日、目が覚めると哲也はすでに仕事に出かけていて、私は一人でぼーっと時間を過ごしていた。

哲也の部屋のベランダの真下には黄金色に輝く寺院があつて、お線

香の煙で霞んでいた。

遠くに空港に続く高速道路が見えた。

夕暮れを背景に、たくさんのネオンやテールランプの鮮やかさが、  
燻る心に色んな影を作った。

夜、帰ってきた哲也と屋台にご飯を食べに行った。

哲也の家から数ブロック歩くと、たくさんの屋台が並んでいた。

香ばしい匂い、スパイスの匂い、あまつたるい、フルーツの匂い。  
それだけでおながが一杯になるような気がした。

「あのさ、まだ、奴のこと好き？会いたい？」哲也が突然そう切り出した。

「え？・・・うん・・・そりゃあ好きにきまつてるよ・・・そんな簡単に気持ちって変わらないじゃん・・・」

「・・・だよね・・・」

「うん・・・っていうか、知ってる？よく考えたらね、私と彼ってね、1回しかあったことないんだよ？たった一回・・・最初で最後だったんだね・・・きつとさ。」

「あははは・・・そうだったね。そっか、あの日だけしかあってないんだ」

「そう、だから、その分愛しいって言うか・・・なぐんか今までとは違うんだよね・・・人に言うの恥ずかしいけど、なんか・・・純愛・・・」

っばいつていうか・・・」

「え？純愛？はははは！純愛かぁ。中学生じゃん」

「そう！そうなの。大人になると、体の関係ってでてくるでしょ？それがないから余計、心と心がごう・・・呼び合うというか・・・ははは。こりゃ〜一生の傷もらっちゃったね・・・」

「・・・そつか・・・一生の傷か・・・ごめんな。」

「なんで哲也が謝ってんの。やめてよ、そういうの。さ、飲もう飲もう。きつと一生一度しか会えない人だったんだよ　ははは。なのに私バカみたいに、一緒になるって思ってた」

ビールで饒舌になった私は屋台のおじさんにビールを追加する。

「・・・のさ・・・今さ、奴、来てるんだよね・・・」　「気まずそうに哲也が切り出した。

「え？」

「いや、あのさ・・・実はさ・・・奴、今、バンコクにいる。・・・んで樹里ちゃん到着する前、昨日も俺、奴と会ってきた」

私たちの横を大きな音でバイクが走っていく。  
きわどいドレスをきたタイの女の人たちが酔っ払って甲高い笑い声をあげた。

「え？・・・どういじこと・・・？」

「実はさ、俺、樹里ちゃん来るって奴に話した。俺もさ、樹里ちゃんから話スキいて、許せないって思ったから。友人として信頼してた奴だし、樹里ちゃんは俺の大事な妹みたいなもんだし・・・」

「・・・哲也・・・」

「それに俺が紹介したみたいなものだしさ・・・そしたら奴、飛んできたよ。樹里ちゃんに会って、話がしたいって、すっ飛んできた・・・」

「・・・」

目の前が霞み始める。

だんだん色んな感情で目が熱くなっていく。

「なぐんか俺もよくわかんないけどさ・・・まだ、好きなんですよ？だったら話してみたほうがいい。樹里ちゃんが一生苦しむ事がないようにさ・・・」

「・・・」

「それで気持ち踏ん切りつくかも出しさ・・・無理はいわないけど・・・でも昨日、樹里ちゃんの話キいて、奴の話も聞いて、俺的にお互いの気持ちに区切りつけたほうがいいと思った」

「・・・でも・・・わかんないよ・・・怖い」

「・・・番号だけ、奴に教えといた・・・」

私たちは黙ってビールを飲んだ。

沈黙の後「・・・ありがとうね・・・なんかね、正直、嬉しいって言うか・・・感動してる・・・かもしれない・・・。彼さ、毎日メールとか電話してくんの・・・そのたび、私はまた彼を好きになっっていく・・・。さよならしてからのほうがどんどん好きになっただけなの。笑えるよね。」

「・・・」

「あの女の人の事はあんまり問題じゃないんだ・・・だってなんかあったとしても、私と出会う前の話だし、私だって過去にいろんな恋愛してるじゃん？だから、そのことで彼を責める気はないのね・・・ただ誰でもいいのか・・・っておもってさ。」

「・・・普通に・・・最低だよな・・・。」

「うん。一夫多妻制とはいえ・・・既婚者だしね・・・。」

「・・・だよな・・・。」

「なんかね、奥さんとかの事、まったく考えて無かった。そこにあの女の人もいたんだって・・・ある意味、彼ってすごいよね。ははは」

「・・・うん・・・」

「私は他の人と同じか・・・って・・・あの幸せな時間はなんだったのかな・・・って言うのが残念っていうか・・・。一人ですっごい特別な気がしてた・・・自分ひとりで感じてたんだろうなあって思ったら情けなくて・・・やっぱ辛い・・・」

「・・・そっか・・・じゃ、会わない？」

「・・・会わない・・・ほうがいい」

その後哲也の部屋と一緒に帰るあいだ、なにもお互い話せなかった。

.....

翌朝、哲也はまた仕事に出かけていた。

冷蔵庫を勝手に開けて食べれそうなものを探す。

ビール以外、何にも入ってなかった。

マンションの横にコンビニがあったことを思い出す。

シャワーを浴びて着替えると、コンビニに出かけた。

マンションの管理人室で鍵を預け、エントランスを抜けると広い遊歩道がある。

その横がコンビニになっていた。

買い物をすませ、コンビニをでると、そこに見覚えのある顔が目に入った。

あの日と同じ、会いたくて、会いたくて何度も願った、  
見覚えのある、あの丸い目、丸い鼻、丸い顔。小さなカールの髪。

立ち止った私を、彼はしっかりと見つめていた。

心臓がひっくり返ってしまっくらい早鐘を打つ。

手足が震え、感覚が冷たくなっていく。

彼は動けないでいる私にゆっくり近づき、静かに微笑んだ。  
その顔は、懐かしく、穏やかだった。

突然、今すぐ抱きつきたい衝動に駆られた。

目の前にいる彼にずっとずっと触れたいと願っていた。

初めて会った日に触れた手が、今、私の頬に触れた。

暖かさが心地よかった。

「……なんているの……？……なにしにきたの？」

やっと口から出た言葉は消え入りそうなほど小さかった。

頬に当たった手をそつと放し、「……会いたかった。やっと会えた」と何度も彼は繰り返した。

「……なんで……？……なんで……？」声にならない声とともに涙が溢れる。

「Oh 樹里……樹里……会いたかった。泣かないで。今、目の前に君がいる……自分でも信じられない。夢じゃないよね。僕らはまた

会えたんだ。」

「・・・お願いだぼくの話聞いてくれ。そしてその後、僕を嫌いになってもいい。でも、ぼくの話を書いてくれ・・・」

ぼろぼろと涙がTシャツに染みをつくる。

その染みの形を不思議な気持ちで見つめていた。そうする事でなんとか平静を保とうとした。

哲也の部屋に戻るエレベーターのボタンさえ、私は押せなかった。足も手も、とても震えていた。

ぎこちなく並んで待つ部屋の階までとても長く感じた。途中落とした鍵を拾うとき、彼の手もまた震えている事に気が付いた。

## c o n f u t i o n

部屋に着き、私たちは離れて座った。

最初に彼が口を開いた。

「・・・樹里・・・元気だった？家族は元気？」

「・・・」

「・・・ずっと電話したんだ。メールも送った。でもキミからは返事がなかった・・・」

「・・・」

お互いに黙ったまま時間が過ぎていく。

遠くで子供の泣く声と自動車の低い音が聞こえてくる。

彼はあの女性と2・3度関係を持ったという。

友人の紹介で知り合って、1年ほど前から友達だったが、ある日、彼女が仕事で落ち込んだ日、

彼女のうちを尋ねると、彼女のほうからそういう関係をはじめた。

でも彼はあの女性に対して、一度も恋愛感情をもったことはなかったという。

向うもそつという感情を見せなかった。

だからただ、「enjoy」したかっただけだと思ったから、自分もそつした。

軽率だった……。

でも、私と出会ってからあの女性との関係が続ける事はできなかった。

そうすればするほど、向かうは引きとめようとした。

そして、私に愛を伝える前、すでに関係は終わっていた。

そんな、都合のいい話をなんとも聞いた。

頭の中で、彼が、薄情な、最低な男だと思った。

結局、自分の欲しいものだけ手に入れて、それでどれだけ関わった人が悲しんだり

傷ついているか、わかっていない。

実際、彼が愛しているという、私もどれだけ傷ついているかなんて、わかっていない気がした。

「……だから僕は、諦めようとした……何度も何度も自分の過去を悔やんだ。」

「……」

「僕は……樹里を傷つけた……そして信頼を裏切った……。樹里は僕のことを嫌いになったよね。」

「・・・」

「だから僕は自分を責めて、樹里が望むように諦めるよう努力した・  
受け入れようとした・・・でもダメだった・・・どうしてもだめ  
なんだ・・・」

うつむいてこぶしを両手で握り締めながら彼は自分の頭をたたく。

「s o r r y . . . s o r r y . . . 。」

何度もごめんと呟く彼を見ていると私も苦しくなって、声を上げて  
泣いた。

わからない・・・わからない・・・

私はただ彼を好きになって、少し特殊な環境で愛を育てた。

旗からみたら、おかしな関係だということも理解している。

二人の感じている「何か」が、愛だと言えば笑われてしまうだろう。

実際、私にもわからない。

「何か」は、今までに感じたことのない、初めてのもので、愛や恋  
や、そんなものより

はるかに根強く私の中に存在している。

・・・運命・・・？

ばかばかしい・・・？

私は泣きながらも頭の片隅で、この男との間に存在するものについてなんとか答えを見出そうとしていた。

.....

ようやく落ち着いてきた私は訥々と、彼に言いたかったことを話し始めた。

「あなたをせめてはいない・・・」

「・・・じゃあ何故」

「だけど、信じる事が出来ない自分が嫌なの・・・嫌いとか、許せないとか・・・そういうのじゃなくって・・・あなたをこれから信じる事が出来ない自分が嫌なの・・・」

「信じなくてもいい・・・樹里が信じたくなったら信じればいい・・・」

「・・・信じたくなくなるかなんてわからない・・・なにもかも、わからないの・・・」

「・・・僕が何度、愛していると君に伝えても、信じなくてもいい。でも僕は自分を信じている。だから僕は樹里を愛する」

「・・・わからない」

「樹里・・・わからなくてもいい、友達だと思ってもいい。でも、僕のことを嫌いにならないでくれ。樹里の声が聞けなくなって、気が狂いそうだった・・・」

悲しみに浸りながらも、彼の言葉は私を喜ばせ続けた。

わかってる・・・  
わかってる・・・

私もそうだよ・・・

でも、その反面、余計に不信感も募っていった。

毎回こんなことをやっているのかもしれない・・・  
そして結局、私を手に入れたら、いつかはあの女性のように、  
いつかは奥さんのように・・・

捨てられる・・・？

ただ、ただ、この先が何も見えない。

目の前にいるこの男を疑いながらもひとつだけ、はっきりしている  
ことがある。

私は彼が欲しい。

「・・・でも・・・あなたには奥さんも息子もいる・・・」

「・・・わかってる・・・樹里の言いたいことはわかってる・・・信じてくれないでもいい・・・でも僕はやり遂げる。」

私たちの気持ちの答えは見つからないまま、ただ時間が過ぎた。

茶番劇的一幕かと思うほど、滑稽な会話だった。

実際、どれだけ彼が私を愛していると言ったところで、彼を信じる事はできないだろう。

でも彼の言うように自分の心は信じられる。

私は彼を愛している。

この先、いつか、もっともっと悲しい現実があるかもしれない。

それでも、私が彼を愛しているのなら、愛すればいい・・・そう思った。

どんな形であれ、彼を愛せるだけ、愛したいとおもった。

シンプルなことだった。

そして私は確信した。

私たちには答えなど存在しないと言う事・・・

ただ、現実があるだけで、二人の気持ちが同じ方向を向いている間は、そのままでもいいのではないか・

辛い悲しい事、嬉しい幸せな事、どれも二人の気持ちが寄り添って同じ方向に進むのなら、その流れに流されていくほうが、我慢して、離れて苦しみがくより耐えられると思った。

私はながい沈黙を破った

「・・・ねえ・・・私はあなたを愛するよ」

そういつて、彼の横に座り、首に両手をまわした。

二人で長い間、ハグをした。

answer

「明日かも知れないし、明後日かもしれない　ははは、来年かもよ？」

いつものように私はPCに向かって話しかけていた。

スクリーンには彼が映っている。

その後ろに彼の友人や同僚の姿がある。

「樹里、早く来てくれ。本当は明日到着なんだろう？」

「あはは。だから、秘密なんだってば。突然私があなたの目の前にいたらうれいでしょう？」

「突然でも、なんでも僕は嬉しい。いつだっつと嬉しい！」

彼の後ろで、友人たちが冷やかしの声を上げていた。

タイから戻ってから半年、彼は離婚した。

その間も二人は以前のように毎日会話していた。

平穏ではなかった。

ちょっとしたことで、私は警戒し、不安になった。

彼の周りにいる人すべてに嫉妬した。

時には彼も嫌気をあらわにした。

タイで再び会うまでのような、ただ幸せな時間ではなかった。

何度も泣いた。

何度も彼を苦しめた。

でも結局、いつも彼は穏やかに私の不安を沈めた。

そしてお互いを求め続けていた。

会話を終えた後、私は荷造りの続きを始めた。

・・・あの国にまた戻る。

これから生きようとする未来は、どんな風に私を変えるのだろうか。  
。。。

何が待ち受けているのだろうか・・・。

不安をチラチラと感じながら、

二人の方向がどこまでも同じでいられたらと思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6880n/>

---

Genuin

2010年10月9日11時54分発行